

「新居への転居。でも屋内の安全が心配で…」

相談内容

要介護1の認定を受けているAさんは現在91歳の女性、一軒家に娘さん夫婦と同居しています。主に入浴のため、週2回デイサービスを利用しています。

Aさんは膝関節症と白内障を患っており、歩行が不安定で、シルバーカーや杖を利用して何とか歩いている状況です。

このAさん一家が、一軒家を処分しマンションに引っ越すことになりました。

マンションは新築でバリアフリー設計ですが、高齢のAさんにとり、住み慣れた家から環境が一変することは大きな負担です。場合によっては、不慣れた室内の移動による転倒などの可能性も考えられます。

そこで、担当ケアマネージャーから北海道介護実習・普及センターに、実際の入居の前に、新居でのAさんの安全のため気をつけること、また住宅改修の必要性の有無などを助言して欲しいとの相談を頂きました。

Aさんの身体状況・生活状況と、新居の状況を確認してみました。

○身体状況

- ・変形性膝関節症で、長時間の立位や歩行が困難。
- ・白内障のため、特に暗いところでものが見えにくい。

○現在の生活（一軒家）の状況

- ・屋外は杖やシルバーカーを使用、自宅内ではつかまり歩き等で移動。靴の着脱など不安定な体勢の動作は、座って行っている。
- ・食事やトイレなどは1階だが、日中は2階で過ごす（階段を自力で昇降）。
- ・古い家のため、室内はバリアーとなる仕様が多数。
- ・長年住み慣れた家のため、屋内での動線は安定しており、考え込まずに移動できる。

○新居の状況

- ・バリアフリー仕様の新築物件。廊下幅等も比較的広めの設計。



<総合意見>

■高齢者にとり、住み慣れた家からの転居は心身共に大きなストレスとなります。生活意欲維持のためにも、なるべく現在の生活パターンを踏襲できるように工夫が必要です（例：ベッドに入る方向が現在と同じになるような向きでベッドを設置する）。

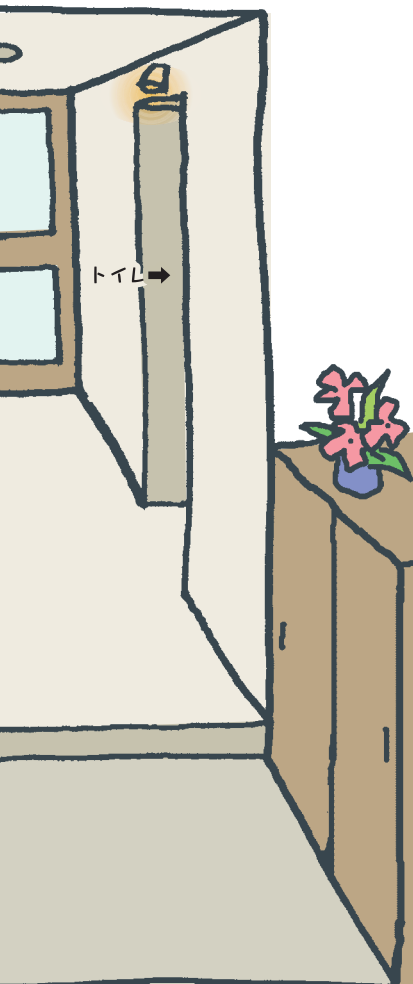
■またこのケースでは、現家屋にバリアーがあることで、身体への負荷（段差など）や活動量（階段の昇降など）が良い意味で強制されていました。バリアフリーの新居に移ることで日常生活の活動性が落ちてしまうことが懸念されるので、デイサービス等での身体機能・能力維持のためのフォローを考えましょう。

■入居前のチェックは以上ですが、新居への転居後こそが支援の本番とも言えます。新生活が落ち着いてきた段階で、入居前に気づかなかった問題がないか、新たな改修箇所が生じていないか、適宜確認していく必要があります。



確認を踏まえ、
Aさんに必要な
住宅改修について
考えました。

専門家からのアドバイス



・廊下の広さに対し、照明の光量が比較的低い。

⇒夜間の廊下の移動(トイレ等)に配慮し、照明を設置する。

照明器具には、スイッチ操作の必要のない「人感センサ」をセットする。

また、照明が眩しすぎてもAさんには見えにくくなるので、間接照明タイプの器具を選ぶ。

・玄関の上がり框は段差4cmと低く、段差が大きいよりもかえってつまずきやすい。色も土間部分と同系統のため、視認性が低い。

⇒土間部分に椅子を設置して、靴の着脱時に使って頂く。

また、上がり框をまたぐ動作の補助のため、上がり框上部に手すり(縦)を設置する。